サキマの歌

Ursula Nafula
Peris Wachuka
Miho Irie

japanska

nivå 3

サキマは両親と４歳の妹と住んでいました。彼らは資産家の男の人の土地に住んでいました。彼らの茅葺き屋根の家は木の並びの最後にありました。

サキマが３歳の時、彼は病気にかかり、視力を失ってしまいました。サキマは才能あふれる少年でもありました。

サキマは他の６歳の子供がしないようなことをたくさんしました。例えば、村で年長の顔ぶれに交じり、重要な問題について議論することができました。

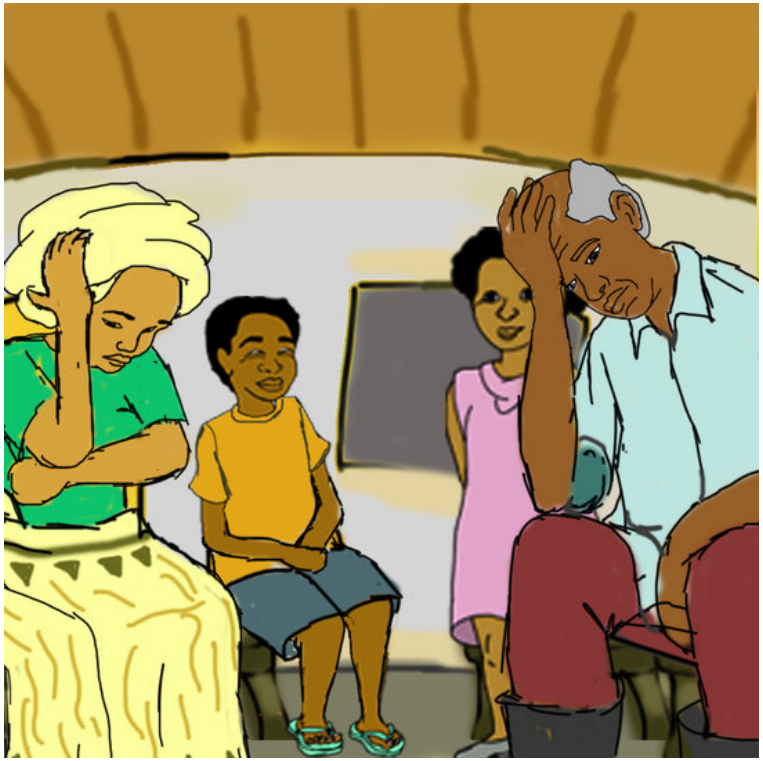
サキマの両親は裕福な男性の家で働いていました。彼らは朝早くに家を出て、夕方遅くに帰ってきました。サキマはその間、幼い妹と家に残されていました。

サキマは歌うことが大好きでした。ある日、母親が彼に「どこでこういう歌を学んだの？ サキマ？ 」と聞きました。

サキマは「僕は歌をただ知っているだけだよ、お母さん。僕は頭の中で歌が聞こえて、それで歌っているんだ。」と答えました。

サキマは妹に歌ってあげることが好きで、特に彼女がお腹を空かせているときに歌ってあげていました。妹は彼のお気に入りの歌を歌っているのをよく聞いていました。彼女はよく心地のいい音楽に合わせて体を揺らしたものでした。

「何度も歌を歌ってくれる？ サキマ。」と妹は彼に何度も頼みました。サキマはそれを快く受け入れて何度も何度も歌ってあげました。



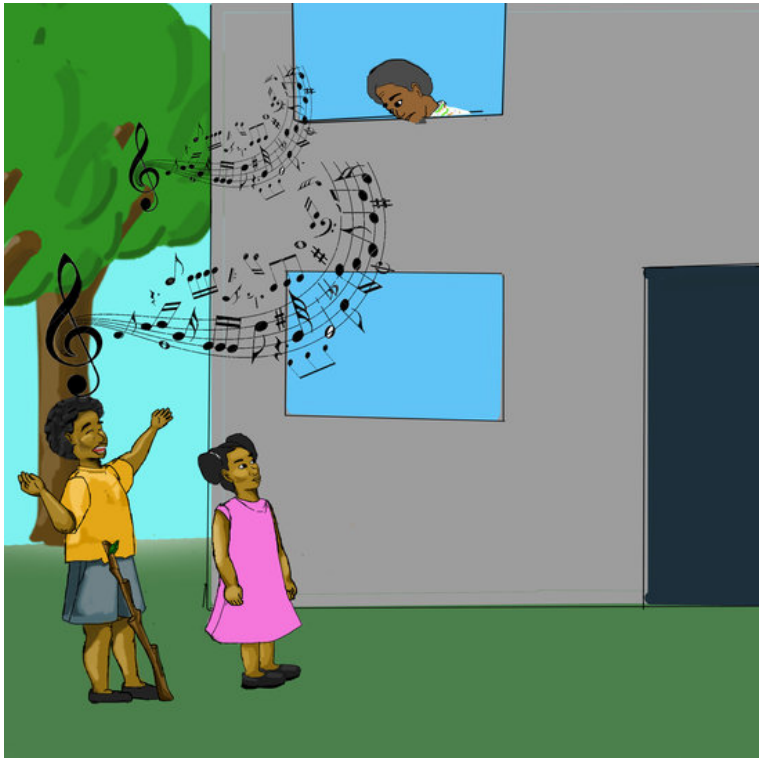
ある夕方、両親が家に戻ってくると、とても深刻そうにしていました。サキマは何か悪いことが起きたのだと分かりました。

「何があったの、お母さん、お父さん? 」とサキマは聞きました。サキマはお金持ちの男の人の息子が行方不明になっていることを知りました。その男の人はとても悲しみ、孤独を感じていました。

「僕が彼のために歌うよ。彼は再び幸せになるかもしれない。」とサキマは両親に言いました。しかし両親は彼の意見を聞き入れませんでした。「彼はとても裕福だ。お前はただの目の見えない男の子だ。お前の歌が彼を救うと思うのか? 」

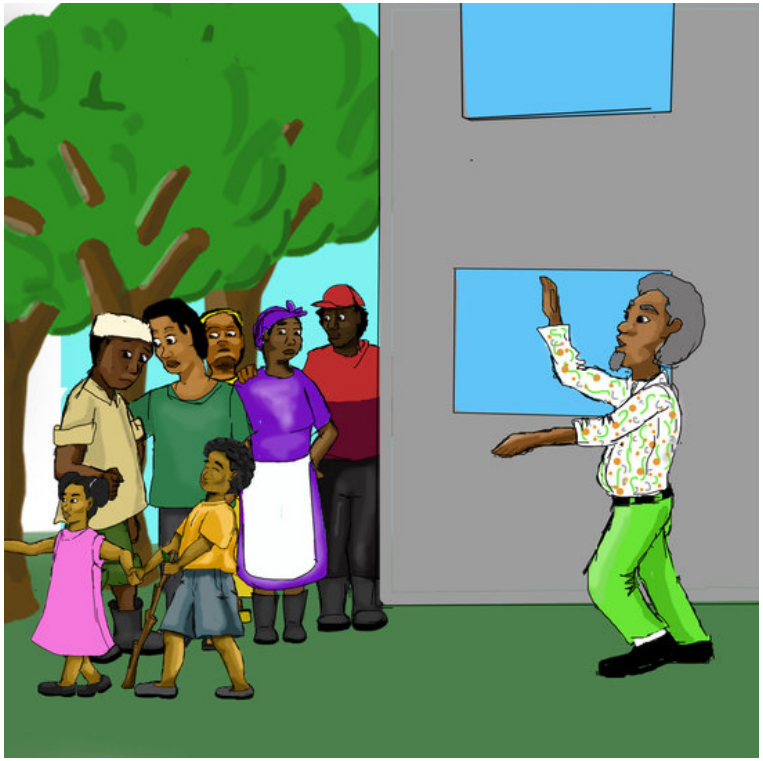
しかしながら、サキマは諦めませんでした。妹も彼を支持しました。彼女は「私がお腹を空かせているとき、サキマの歌が心地よくさせてくれるんだ。歌は裕福な男の人も心地よくさせるだろうな。」

次の日、サキマは小さな妹にお金持ちの男の人の家までの案内を頼みました。



彼は窓の下に立って、お気に入りの歌を歌い始めました。ゆっくりと、お金持ちの男の人の頭が窓から見え始めました。

労働者はやっていることをやめました。彼らはサキマの美しい歌を聞きました。しかしある男の人が言いました、「誰もボスを元気づけられないままだ。この目の不自由な男の子は慰められると思っているのか? 」



サキマが歌い終わるその場を離れようと踵を返しました。しかし資産家の男の人が慌てでできて、言いました、「もう一度歌ってくれ。」

まさにその時、二人の男の人たちが担架に誰かをのせてきました。彼らは、殴られ、道のそばに置き去りにされていたお金持ちの男の人の息子を見つけたのでした。

その人は再び息子を見られてとても喜びました。彼は元気づけてくれたサキマを褒めました。彼は息子とサキマを病院に連れていき、サキマは再び目が見えるようになりました。

Sagor för barn på svenska

berattelser.se

サキマの歌

Skriven av: Ursula Nafula
Illustrerad av: Peris Wachuka
Översatt av: Miho Irie

Denna saga kommer från African Storybook (africanstorybook.org) och vidarebefordras av Sagor för barn på svenska (https://berattelser.se/), som erbjuder sagor på många språk som talas i Sverige.

Detta verk är licensierat under en Creative Commons
Erkännande 4.0 Internasjonal Lisens.